
ルーフトップ・セレナーデ

ジョン・G・エコー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ルーフトップ・セレナーデ

【Nコード】

N6200Y

【作者名】

ジョン・G・エコー

【あらすじ】

大学時代にバンドを組んでいた僕と斉藤は十年ぶりに再会する。斉藤と話すうちに僕はいろんなことを回想する。僕はギターで、斉藤はベース。ドラムは祐子という女の子で、ボーカルのサトシは物静かな文学青年のような奴だった。

その夜、僕たちは十年ぶりの再会を祝った。そこは表参道から一歩路地に入ったうす暗いショットバーで、六十年代のオールデイーズが流れていた。

「ちつとも変わっていないんだな、あの頃と」

ギネスビールで手際よく乾杯を済ませると、旧友はそう言って微笑んだ。意味もなく年上ぶる口調は相変わらずだ。斉藤と僕は同じ学年だったが、彼は一浪で、年齢はひとつ上だった。

「よしてくれよ。お互いもう三十代も折り返しだぜ。あの頃に比べたら腹も出てるし、しわも増えた。白髪を見つけたって何の感慨もない」

「違うよ」と斉藤は苦笑した。「この店のことだよ。古びたカウンター、ジュークボックス、弾き手のいないグランドピアノ。おれたち、よくここに来て真夜中まで話してたよな。バンドの練習が終わったあとにさ」

「ああ。今から思うとどうでもいい話ばかりだったけどな」そう言っただけで僕はギネスを飲み干し、「自分自身のことはどう思う?」と聞いてみた。

「どう思うって、何が」

「あの頃と比べて自分が変わったと感じるかどうか」

ふむ、と言っただけで斉藤は少し考えた。

「その答えはイエスであり、ノーだな。ノーであり、イエスだ」学生の頃からの斉藤の口癖だった。会話をはぐらかしたいとき彼は決まってそう答えた。

「変わってないんだな」と僕が言って、ふたりは声をあげて笑った。斉藤は小さく手を挙げて店員を呼び、二杯目のギネスとミックスナッツを注文した。

「ところで、ニューヨークからはいつ戻ったんだ」と斉藤が聞い

た。

「けさだよ。だから眠くて仕方がない」

「レコーディングの調子は？」

「上々だ。それよりそっちはどうしてる。双子のジュニアは元気かい」

「ああ、元気すぎて困ってるよ」

照れくさそうに目を細めた旧友は、年齢より少しだけ老けて見えた。

大学時代、僕らは洋楽好きの仲間二人とバンドを組んでいた。「ザ・バーニング・トラッシュ」という名前で、僕がギター、斉藤はベースを弾いた。ローリング・ストーンズやザ・バーズ、デレク・アンド・ドミノスなんかを手探りでコピーした。メンバーが持ち寄ったオリジナル曲をライブハウスで演奏することもあった。

決して下手ではなかったが、といってメンバー全員が「プロ志向」というわけでもない。四人で音を鳴らすのが、ただ楽しかった。

貸しスタジオで練習した夜は、ビールを飲みながら閉店まで語り合った。テーマはバイトの愚痴か、スケベな教授の女の噂、流行りのラーメン屋といったところで、恋の悩みや将来の夢みたいな、若者特有の話題は出なかった。理由は分からない。意図的に避けていたのかどうか。とにかく、それが僕らの流儀だった。

ある日突然、春が来て、僕たちは大学を卒業した。無限に思えた学生時代はCDショップの試聴盤みたいにあっけなく終わり、四人はそれぞれの道を歩き始めた。海の向こうでイーグルスが再結成したその年の冬、ザ・バーニング・トラッシュは解散した。

僕は電器メーカーに就職し、斉藤は商社に勤めた。「布団を専門に扱う小さな会社だ」と彼は手紙に書いて寄越した。その後、職場の同僚と結婚し、今は五歳の双子の父親だ。

「祐子と会ったんだよ」

声がして、手元のグラスから視線を戻した。斉藤はナッツの皿を手でかき回しながらメニユーをながめていた。

「え、祐子？」

「うん、そう。ドラムの祐子。後輩の結婚式でばったり会ってさ。そのまま飲みに行ったんだ。新宿のはずれの焼鳥屋」

「どうしてた？」

「元気だった。昔からよく笑う子だったけど、相変わらずだったなあ。あいつ、卒業してしばらく海外に行ってたらしい。ドイツって言ってたかな。そこで結婚したんだってさ。現地の人と。何とかっていう難しい名前だった。高級包丁みたいなの。とにかく、今はベルリンだかミュンヘンだから、その夫と幸せに暮らしてるんだとさ」

学生時代、祐子はわれわれとは違う大学に通っていた。厳格な校風で知られるキリスト教系のお嬢様大学で、「なじめないのよね」とこぼすのを何度か聞いたことがある。

彼女はショートカットの髪を赤く染め、前歯に小粒のダイヤを埋めていた。格好は派手だが、背はさほど高くなく、すっきりした顔立ちは周囲によい印象を与えた。ほかのバンドでドラムをたたいていたのを斉藤が見つつけ、うちのバンドに引き抜いたのだった。

「小林さあ」

斉藤はメニユーを置いて、探るような目つきで僕を見た。

「……お前、祐子のこと好きだったろ」

僕は視線をそらさず、無言のまま向き合った。遠くのほうで笑い声が聞こえた。曲がやみ、ジュークボックスが機械的な音を立てて次の曲を探した。

「よせよ」苦笑まじりに僕は言った。「だってあいつは、祐子はサトシと……」

斉藤は表情を変えず、こちらを見ていた。その視線は確証を得たベテラン刑事のようで、カツ丼でも食うか、とでも言いたげだった。

僕が祐子と初めて会ったのは七月の、雨の降る夜だった。そのと

き彼女は斉藤に誘われて、ザ・バーニング・トラッシュのライブを見に来ていた。終演後、楽屋に顔を出した祐子は、とてもよかったと感想を述べた。

「よかったって、具体的にどうよかったんだよ」と斉藤が聞いた。「うまく言えないけど」と言ってから彼女は少し考えた。「正直に言っわ。リズムセクションの息がいまひとつ合ってなかった。ドラムの人はサポートね？」

斉藤が愉快そうに笑った。「その通り。だから君に来てもらったのさ」

「おい、待てよ。田辺はどうすんだよ」とサトシが口を挟んだ。

「田辺には自分のバンドがある。僕らにはやっぱり専属のドラマーが必要だと思っんだ。違っかい」

斉藤がそう言っ僕に同意を求め、楽屋にいる全員の視線がこちらに集まった。まいったな。僕はこの手の駆け引きが苦手だった。その場をおさめるために「とにかく一度、音を出してみよう」と提案した。

翌日の昼下がり、サトシと斉藤、僕、それに祐子の四人は大学構内の練習室に集まった。

斉藤がベースをアンプにつなぎ、僕はギターを調弦した。チューニング祐子は最初、様子をうかがうようにドアの近くにたたずんでいたが、やがてゆっくりと部屋のすみに置かれたドラムセットに歩み寄った。椅子を少し下げて座り、スネアの位置をわずかにずらす。

どすん。バスのドラの低音が「準備完了」を宣言し、ドラムスティックが催促するように、チツチツチとシンバルを揺らした。

サトシがうなづいてマイクスタンドを握りしめ、「ジャンピング・ジャック・フラッシュ」を歌った。僕らもそれにあわせて音を鳴らした。祐子のドラムは流れるように正確で、ほとんど完璧に近かった。

斉藤が横目で僕を見て、にやりと笑った。

新しいドラマーの加入で、僕たちのバンドは上昇気流をつかんだようだった。

その年の秋はいくつかの大学の学園祭に呼ばれ、「全国ツアー」と称してレンタカーのワゴンで各地を回った。

移動中の車内では、それぞれが楽器を口まねし、アカペラで練習したりもした。疲れて寝ている時間を除けば、くだらない冗談や笑い声が僕らの周囲から消えることはなかった。

ツアーの終盤、鎌倉に近い海辺のファミレスで休憩したことがあった。

サトシと斉藤が用をたしに行つたので、僕は先に店を出て防波堤に座り、海をながめていた。海岸線の先に小さく江ノ島が見えて、上空をカモメが旋回していた。

店から出てきた祐子が、僕に近づいてきた。「バーニング・トラッシュユッて」と祐子は言った。僕は振り向いて彼女を見た。「変わったバンド名ね。誰が考えたの」

「どうだろ。多分、斉藤が言い始めたんじゃないかな。バンドは最初、僕と斉藤の二人で始めたんだ。そのうちに斉藤がバイト先で知り合つたサトシを引っ張り込んだ。当時はまだ名前もなくて、火曜と木曜に集まって練習するだけの遊び仲間だった」

祐子は海からの風に流される髪の毛を、まるで飼い猫をじゃらすみたいにかき分けながら、じつと聞いていた。

「最初のライブが決まって、何か名前をつける必要が生じたんだよ。何でもよかった。『ロテリーズ』というのが有力候補だった。宝くじという意味。斉藤が宝くじ売り場で働いていたからね。だけど、誰かが『バーニング・トラッシュ』にしようと言い出したんだ。バンドの練習日が、燃えるごみの収集日と同じだからって。それで決まり」

「そうなんだ」と言って、祐子はおかしそうに笑った。

そうしているうちにサトシと斉藤が店を出て、駐車場のワゴンに

乗り込んだ。祐子が車へと向かい、僕もあとを追った。

東京までの帰り道はサトシが運転する番だった。後部座席で斉藤は眠り、ヘッドホンをした祐子はドラムスティックでシートの背中をたたいていた。僕は眠ったふりをして彼女の横顔をながめた。

祐子とサトシが付き合っているという噂はその頃からあったけど、ふたりともそんな素振りは少しも見せなかった。僕にはその噂が本当なのかすら、判断がつかないでいた。

サトシは口数の少ない男だった。細身で背が高く、ステージ以外ではいつも地味なメガネをかけていた。練習の合間はたいてい小説を読んでいて、文学青年のような雰囲気を漂わせていた。当然、女の子のファンは多かった。だけど彼はそういった喧騒にまったくと言っていないほど無関心だった。

あれは確か、卒業が近づいた大学四年の冬だった。祐子がバンドに加わって一年が過ぎていた。大学構内のたまり場で時間をつぶしているときサトシが不意に「屋上ライブをやらないか」と言い出した。

「冗談だろ。外、寒いぜ。それになんで屋上なんだよ」

吸いかけのタバコを空き缶に突っ込みながら、似合わないスーツを着た斉藤がサトシに抗議した。しかし、予想に反してサトシは真剣だった。

「ビートルズだよ。見たことないか。ポール・マッカートニーがコートを着込んでさ」

「ああ」と僕は思い当たった。ジョン、ポール、ジョージ、リングの四人がロンドンの寒空の下で「ゲット・バック」をゲリラ演奏する、あれだ。集まった野次馬や警察官が屋上を見上げる。子供のころテレビで見た光景。伝説のルーフトップ・コンサート。

「そう、それぞれ。いつペン、やってみたかったんだ。あのフィルムでさ、演奏を止めに来た警官がいつの間にかリズムに乗って揺れてるんだ。おれさ、子供心に音楽ってすげえなって思ったんだよ」

「面白そう。ねえ、やろうよ、それ」
祐子が同調すると、斉藤も観念したようだった。

僕たちは缶チューハイと楽器を携えて第一校舎の屋上庭園に上がった。運よくそこには誰もいなかった。空気の澄んだ、風の冷たい月曜日だった。遠くに新宿の高層ビル群が見えた。日はすでに暮れかけていて、空は鮮やかな青から薄い紫にかけて淡いグラデーションを描いていた。

落下防止フェンスの前まで来てサトシは、コンクリートの台に腰掛け、アコースティックギターを抱いた。

「諸君、これは僕にとつて最初で最後のラブソングかもしれない」
そう言うのとギターの弦を指で弾きながら、かすれた声で歌い始めた。一度も聴いたことのないオリジナル曲だった。注意深く選び抜かれた簡素なコードと透明なメロディー。それらに乗せてサトシは、失われゆく何かについて歌っていた。

その歌声は、死者を弔う挽歌のようでもあり、生まれ来る生命を愛おしむ讃歌のようでもあった。

僕たちはしばらくサトシの歌に聴き入った。次第に曲調は強くなり、かじかんだ右手が激しく六本の金属線をかき鳴らした。ふと、祐子がどんな表情でいるのか気になった。だけど、僕はあえて見ないことにした。それよりも彼の歌を聴いていたかった。

間もなくあたりは暗くなり、屋上に設置された夜間灯がステージライトのように四人を照らした。その晩、僕らはその場所で、気の向くままにいくつかの曲を演奏した。

サトシが人前で歌ったのはあれが最後だったのかもしれない。あの夜を境に彼はバンドから遠ざかった。

その一年後、サトシは死んだ。

サトシが死んだ理由は分からない。自殺かもしれないし、事故かもしれない。どちらであつても大きな違いはない。

大学を卒業して半年以上が経過していた。お互い連絡も途絶えがちになり、それぞれが新しい生活に順応しようとしていた。

その日、僕はいつものように残業を終えてアパートに帰った。留守番電話に斉藤のメッセージが残っていて、はじめてサトシが死んだことを知った。

斉藤の声は「祐子と連絡を取りたいが、どこにいるのか分からない」と告げていた。いやな予感がした。僕は脱いだばかりのコートをつかんで、部屋を飛び出した。

外は小雨が降っていた。半年前まで通っていた大学のキャンパスは人影もなく、ひっそりとしていた。バンドのたまり場や練習室を探したが、どこにも祐子はいない。かつて練習に使った貸しスタジオや、表参道のショットバーにも行った。店員に祐子の特徴を伝えても、彼らは異口同音に「残念ですが」と首を振った。

雨は強くなっていた。青山通りを濡れながら渋谷に向かって歩いた。思い当たる場所はもうない。お手上げだ。横を通り過ぎる乗用車が、泥を歩道にはねあげて行った。

「おれさ、子供心に音楽ってすげえなって思ったんだよ」

「諸君、これは僕にとって最初で最後のラブソングかもしれない」
雨の中でサトシの声を聞いた。

そうだ！ 伝説のルーフトップ・コンサート。

僕はもう一度キャンパスへ向かった。銀杏並木の坂道を走り、図書館の前を通り過ぎ、第一校舎にたどり着くと階段を駆け上がった。屋上庭園につながる扉をあける。

祐子はそこにいた。フェンスの前で、雨に打たれ、ひざを抱えてあの夜と同じように夜間灯のスポットライトを浴びていた。

僕と祐子に乗せたタクシーは、街道沿いにある六階建てマンションの前で停まった。

祐子の部屋は五階にあった。リビングの窓からはライトアップされた東京タワーが見えた。すぐそばを高速道路が走っている。

祐子はぐったりとソファにもたれかかった。小さな肩が震えていた。僕は風呂場から持ってきたバスタオルで彼女をくるみ、買ってきたウイスキーを温めて手渡した。祐子はそれを少し口にふくむと、激しくせき込んだ。

「大丈夫？」と僕は聞いた。濡れた前髪の間からのぞく表情に力はなく、伏し目がちに祐子は小さくうなづいた。両手が僕の背中に回り、引っかくように強く抱きしめた。

雨は静かに高速道路の路面をしめらせ、行き交う車のタイヤの音が、まるで潮騒しおさいのように近づいては消えて行った。

腕の中で祐子は眠りについた。僕は朝まで彼女を抱いていた。

次に彼女と会ったのはサトシの葬式だった。その日、斉藤と祐子と僕は卒業以来はじめて顔をあわせた。

「きょうをもつてザ・バーニング・トラッシュも解散だな」

葬儀が終わって一息ついた頃、斉藤が小さな声で言った。祐子はうなづいた。三人にとってそれは暗黙の了解事項だった。

「会社を辞めようと思ってるんだ」と僕は切り出した。「馬鹿げてるかもしれないけど、しばらくはギタリストとしてプロの世界でどこまで行けるか、自分を試してみたいんだ」

ちっとも馬鹿げてやしない、素晴らしいことじゃないか、と二人は口々に励ましてくれた。

それから僕らは、バンドの思い出と、新たな出発に乾杯した。

解散式からしばらくして、祐子からエメールが届いた。ドイツ南部の小さな町で暮らしているという簡単な近況報告と、写真が一枚同封されていた。赤レンガ屋根の町並みを背景に微笑む彼女は、学生時代と少しも変わっていないかった。

「そろそろ閉店の時間なんですが」

店員に声をかけられ、周囲を見渡した。深夜のショットバーにもうほとんど客の姿はなかった。

斉藤と僕は支払いを済ませて店を出た。夜の表参道を原宿駅の方へ歩いた。

「祐子はサトシを愛していた。それだけは確実に言える。おそらくサトシも同じだろう」

前を向いたまま、僕は言った。

少し酔った斉藤は面食らったように僕の横顔をまじまじと見ていた。僕は気にせず歩き続けた。

「そうかもしれないな」

斉藤はひとり納得したようにそう言った。そして僕のほうへ向きなおり「で？」と聞いた。

「で、って何」

「で、お前自身はどうなんだよ」

「どうって何が」

「だから、お前は、祐子のことを好きだったのかって」と斉藤は食い下がった。ベテラン刑事は執念深かった。

「それは……」

僕はビルの屋上を見上げた。都心の夜空には月が浮かんでいて、いつになく明るくオリオン座が輝いていた。

「その答えはイエスであり、ノーだな」と僕は答えた。

ノーであり、イエスだ。「了」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6200y/>

ルーフトップ・セレナーデ

2011年11月18日14時56分発行